

ギャロン ボラ 嘉戎語 莫拉方言の使役表現*

長野 泰彦

1. はじめに

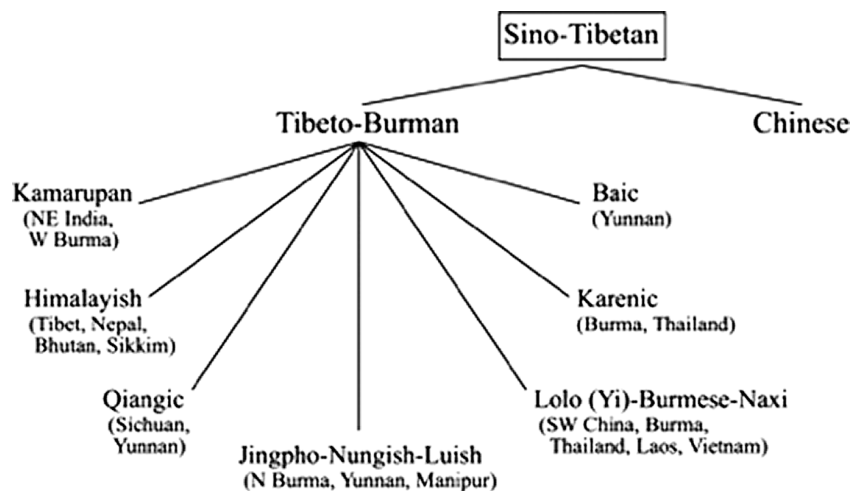
小稿は嘉戎（ギャロン：WT rgyal rong）語莫拉（ボラ：WT bho la）方言における使役表現のアウトラインである。嘉戎語は中国四川省西北部に話されるチベット・ビルマ系の言語で、複数の下位言語群の特徴を兼ね備え、系統関係の橋渡し役を演じる繫聯言語のひとつと見做されている。現代の繫聯言語は典型的に多様であるが、同時に様々のレベルで古態をも保っていることが多く、それらの言語記述はチベット・ビルマ諸語の歴史研究に不可欠と考えられている。

嘉戎は歴史的・文化的にチベットとの関係が深く、特に宗教の面でボン教の一大シェルターであったことやチベット仏教教理の偉大な学者を多数輩出したことも手伝って、多くの文語チベット語形式を借用し、接辞を含めそれらを口語として受け入れた。このため、嘉戎語はチベット語の古い層を代表していると考えられたことがあった。

しかしながら、Wolfenden（1929, 1936）以来記述が積み重ねられてきた結果、上に述べたチベット語との直接的な系統関係は否定された一方、チベット・ビルマ祖語と比較できるほど古い語彙形式や形態統辞論的手続きを保持していることとともに、高度に発達した人称接辞及びその agreement 体系など後代の innovation と考えるべきものも少なくないことが明らかになった。また、系統関係についても、嘉戎語はチベット語とではなく、羌系諸語と共通の祖語をシェアするとの考え方が一般的になってきている。参考までに、Matisoff によるシナ・チベット諸語の相関図（系統樹ではない）を示す。ここに rGyalrong は明示されていないが、STEDT の language coding では Tangut-Qiang 語支の下、rGyalrong 語群に分類されている。

これらの議論にとって中核的な研究は動詞構造の形態統辞論的解析である。幾つもの接辞が生産的に働き、動詞句の文法的意味が精緻に特定される。そこには、極めて複雑ではあるが、入念に練られた統辞論的ルールが機能しており、それが同時にチベット・ビルマ祖語段階の統辞論を考える上でも有用な鍵となる。使役表現も主として動詞句内に現れる。

* 本稿は、2018年3月11日（日）に京都大学人文科学研究所にて開催されたTB+（プラス）研究会での報告「ギャロン語ボラ方言の使役表現」を文章化したものである。報告時には参加者各位より有益な御意見をいただいた。なお本稿は平成28-29年度日本学術振興会科学研究補助金基盤研究（A）「チベット・ビルマ語族の繫聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号16H02722）による研究成果の一部である。

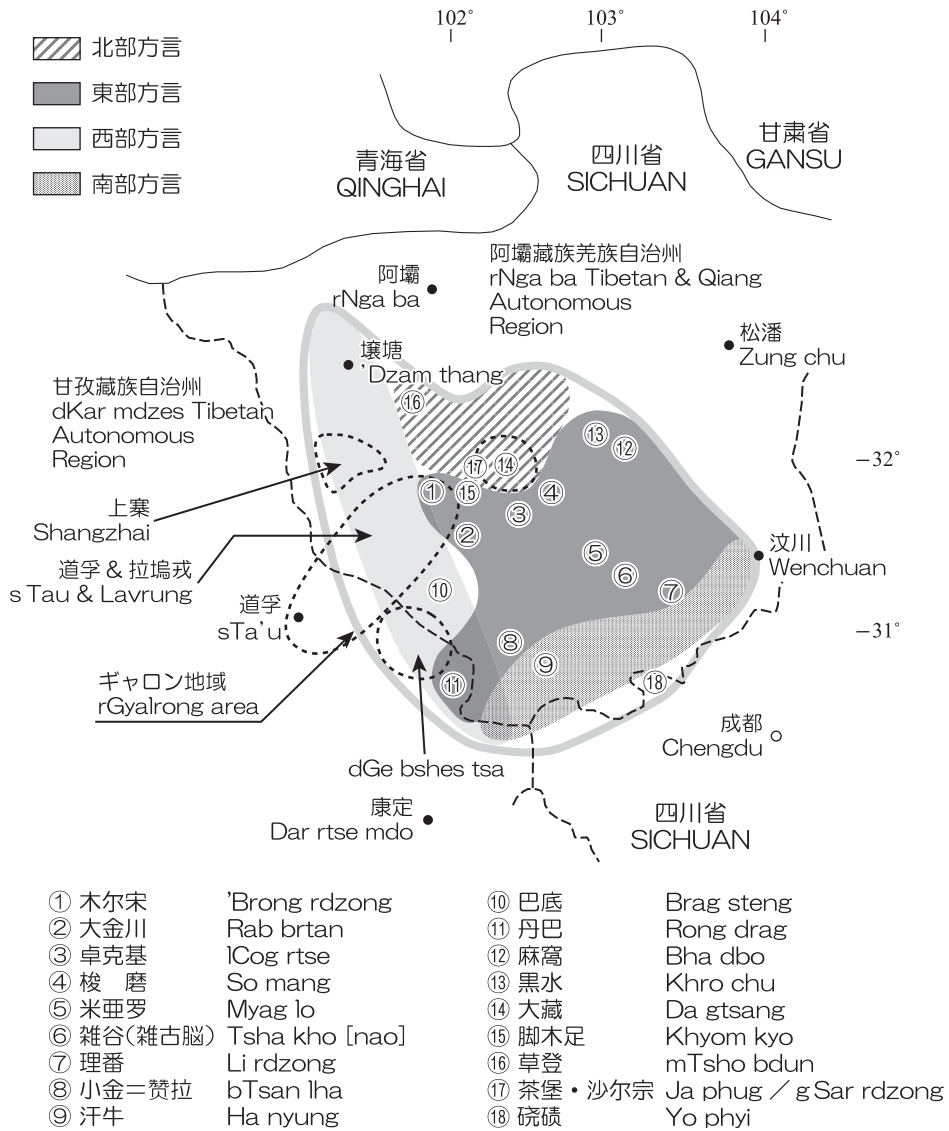


音論概略

p ph b	t th d		ʈ ʈh ɖ		k kh g	ʔ
	ts tsh dz	č čh ǰ		c ch j		
	s z	š ž				h fi
m	n			ñ	ṇ	
	r					
w	l			y		
i	u					
e	ə	o				
a	ɐ					

通常 /i/ は音声的に [i], /e/ は [ɛ], /u/ は [u] である。また、長短の区別は弁別的でない。

ギャロン語莫拉方言の音節構造は一般に (C₁)C_i(G)V(C_f)(C₂) であり、括弧で括った部分はオプシオンである。C₁ に立ちうるのは p-, t-, k-, r- l-, s-, š-, m-, n- である。このうち、p-, t-, k-, s-, š- は有声の C_i の前で有声化する。fi を除くすべての子音が C_i に立ちうる。V は母音。G は介音であり、-r-, -l-, -w-, -y- の4種類がある。C_f は -p-, -t-, -k-, -ʔ-, -č-, -s-, -fi-, -m-, -n-, -ṇ-, -ñ-, -l-, -r-, -w-, -y- のいずれかである。C₂ は s または人称接辞であり、n, ṇ, ñ, nč, č, w, y のいずれかである。



地図 嘉戎語方言及び嘉戎系諸語の分布 (©Y. Nagano 2018)

2. 動詞句の一般的構造

動詞句の一般構造は次のように記述できる。

[(名詞句) + VPnon-final]ⁿ (助辞) [(名詞句) + VPfinal] (判定詞または助動詞)。

但し、n は 0 または 1 または 2。また、VPnon-final は kə/ka- 語幹。

VPnon-final は不定形であり、動作を表す動詞（動態動詞）語幹には ka- が、それ以外（多くは状態動詞）の語幹には kə- が前接する。

VPfinal は次のように記述される。

VPfinal → P1 - P2 - P3 - P4 - P5 - 語幹 - (s) - S1

これは接辞の語幹との距離によって相対的に位置づけた概念的な接辞の並び方である。この内、

P1 は「ムード」標識。疑問、命令、禁止、否定、などを表す。

P2 は「テンス・アスペクト標識」で、Past/Non-Past の区別と、動詞の表す動きの諸様相を指定する。Past/Non-Past の区別には方向接辞が重要な役割を担う。

P3 は「エビデンシャル」標識で、ギャロン語が鋭敏な情報の直接性・間接性などを示す。

P4 は人称接辞で、S1 とペアをなす。動作者、被動作者、ゴール、経験者、受益者など的一致 (agreement) を指定する。

P5 は Voice 標識、動作の様態などを示す副詞的標識で、様態を指定する他に、動詞化や他動詞化の手続きを含む。これには下記の 10 種が含まれ、小稿が記述する使役表現も P5 に現れる接辞によって実現される。

副詞的接辞 wə

使役を示す接辞 sə-, šə-, rə-, wa-

相互動作を示す nə-

反復動作を示す ra- と na-

意志で制御しがたい動作を示す mə-

再帰を表す nə-

適用態 (applicative) を表す na-

判断の転換 (estimative/tropative) を表す ne

非人称を表す nə-

動作者が特定されない行為の様態を表す nu-

(s) は動詞語幹につく単一の派生的接尾辞で、かつ、完了標識でもある。

3. 語幹レベルでの自他の区別

莫拉方言で VPfinal 内で P5 接辞として生産的に使役を表現するものに 4 種を認めるが、これらの生産的接辞を説明する前に、レベルでの自動詞と他動詞の区

別の幾つかを列挙しておく。

s-jur	「変える」	:	n-jur	「変わる」
s-kor	「廻す」	:	n-kor	「廻る」
s-krə	「巻く」	:	n-krə	「巻かれた状態になる」
s-roñ	「見せる」	:	∅-roñ	「見える」
r-was	「起こす」	:	∅-was	「起きる」
r-to > r-do	「会う」	:	m-to	「見える」
k-tsum	「つぶる」	:	n-/m-juṗ	「閉じる」
k-ram	「乾かす」	:	∅-ram	「乾く」
p-ram	「乾かす」	:	∅-ram	「乾く」
(ka-)tuw	「開ける」	:	(kə-)ñə-tow	「開く」
(ka-)čat	「閉める」	:	(kə-)ñə-čat	「(戸が) 閉まる」

P5 接辞が母音要素を失い、語幹の一部のように振る舞うようになっているものもあるし、その逆に、意味を明確化するために語彙化した接辞に母音を挿入して脱語彙化したり、接辞が語彙化した語幹の前にさらに別の接辞を置く過程も見られる。この接辞の母音要素消滅と挿入の過程はチベット・ビルマ系諸語に共通して広く起こった事象であると推察できる。

4. 使役を示す P5 接辞

使役を示す生産的接辞には sə-, šə-, rə-, wa- の4種がある。このうち、sə- と šə- は TB 祖語に来源を求めることができ、rə- と wa- についても他の TB 諸語に同源と思われる形態を見いだせる。これら生産的な接辞の他、より古い時代に既に動詞語幹に語彙化したものもある。

一方、脚木足（キョムキョ）方言と茶堡（ジャブツク）方言では sə- と šə- は Indirect、rə- と wa- は Direct という考え方もある。しかし、莫拉方言ではこの区別は必ずしもあてはまらない。

4.1. sə-

この接頭辞は使役マークとして最も頻繁に用いられるもので、自他を区別する。

- (1) bišer tərmi tokəydzum {to-kə-yidzum-∅}.
 昨日 人 PST-3p-集まる-3
 昨日人々が集まった。

(1a) *ña bišer tərmi tošəydzuñ {to-sə-yidzum-ñ}*.

1s 昨日 人 PST-CAUS-集まる-1s

私は昨日人を集めた。

上の例文中、*to-*は「過去の非完結相」を表す。また、*yidzum*の*yi-*は本来一般的移動を示す方向接辞であるが、語幹に同化している。

(2) *ñižo ñ-əmñak ro mə-ños?*

2p 2p:GEN-眼 起きる Q-LKV

起きますか？

(2a) *ña tapu w-əmñak nəšəroñ {nə-sə-ro-ñ}*.

1s 子供 3s:GEN-眼 PST-CAUS-起きる-1s

私はその子を起こした。

(2a)の*nə-*は本来「下流へ」を表す方向接辞だが、この接辞は一般に過去を示す。

(3) *štə w-əṭha w-əngu=y tadok toñəcolo {to-ñə-colo} noto.*

これ 3s:GEN-茶 3s:GEN-中=LOC 毒 DIR-REC-混ざる AUXex

この茶には毒が混じっている。

(3a) *štə w-əsmən təji w-əngu=y tošəcolow {to-sə-colo-w}.*

これ 3s:GEN-薬 水 3s:GEN-中=LOC IMP-CAUS-混ざる-2s

この薬を水に混ぜよ。

(3)(3a)では*ñə-colo*が*sə-colo*に差し替わることにより使役が表現される。*ñə-colo*の*ñə-*も本来動作の様態を示すP5接辞だが、unitary rootではないので、*sə-*が出現するとそれとは共起しない。

(4) *štə w-ətasi kə-gurgur noto.*

これ 3s:GEN-棒 INF-曲がっている AUX

この棒は曲がっている。

(4a) *ña tətasi sə-gurgur.*

1s 棒 CAUS-曲がっている

私は棒を曲げよう。

- (5) *ña nə-che-ń.*
1s REFL-酔う-1s

私は酔いそうだ。

- (5a) *wuyo=kə tərmi=tə to-sə-che-w.*
3s=ERG 男=DEF PST-CAUS-酔う-3s

彼はその男を酔わせた。

sə-kšot のようにやや込み入った歴史を抱える語彙もある。これはもともと *kšot* 「習う」に CAUS が接頭した形だが、「習わせる」の意ではなく、「教える」を意味する。そして現在では *kšot* が「習う」の意味で単独で使われることがなくなり、*səkšot* だけが *sə-* が語彙化した形で残っている。現在「習う」の意味で単独で使われるのは *ka-slap* である。

- (6) *wužo kuru? skat mažu sokpo skat=tsə na-səkšot.*
3s チベット 語 また モンゴル 語=も PROG-教える

彼はチベット語だけでなく、モンゴル語も教えていました。

- (6a) **wužo kuru? skat mažu sokpo skat=tsə na-kšot.*
3s チベット 語 また モンゴル 語=も PROG-習う

彼はチベット語だけでなく、モンゴル語も習っていました。

- (6b) *wužo kuru? skat mažu sokpo skat=tsə na-slap.*
3s チベット 語 また モンゴル 語=も PROG-習う

彼はチベット語だけでなく、モンゴル語も習っていました。

次に *sə-* が「・・・をして～せしめる」の意での使役に転換する例を検討する。

- (7) *ña ń-ənge wan {wat-ń}.*
1s 1s:GEN-着物 着る-1s

私は（自分の）着物を着よう。

- (7a) *ña tapu w-ənge səwan {sə-wat-ń}.*
1s 子供 3s:GEN-着物 CAUS-着る-1s

私は子供に（彼の）着物を着せよう。

- (7b) *ña(=kə) tapu w-ənge ń-əpya səwan {sə-wat-ń}.*
1s(=NIF) 子供 3s:GEN-着物 1s-妻 CAUS-着る-1s

私は家内をしてその子に（彼の）着物を着用せしめよう。

- (8) *ña ñ-əŋge nə-tɛ-ñ.*
 1s 1s:GEN-着物 PST-脱ぐ-1s
 私は着物を脱いだ。
- (8a) *ña w-əŋge nə-sə-tɛ-ñ.*
 1s 3s:GEN-着物 PST-CAUS-脱ぐ-1s
 私は彼の着物を脱がせた。
- (8b) *ña(=kə) w-əŋge ñ-əwos nə-sə-tɛ-ñ.*
 1s(=NIF) 3s:GEN-着物 1s:GEN-使用人 PST-CAUS-脱ぐ-1s
 私は使用人をして彼の着物を脱衣させた。
- (9) *ña wuʃo tama kə-sə-pa ños.*
 1s 3s 仕事 NOM-CAUS-する LKV
 私は彼に仕事をさせよう。
- (10) *wuʃo(=kə) tətha ña yi-sə-tsam.*
 3s(=NIF) 本 1s DIR-CAUS-運ぶ
 彼は私に本を運ばせた。
- (11) *ña dawa sonam=gə ta-sə-top-ñ.*
 1s ダワ ソナム=FOC PST-CAUS-殴る-1s
 私はダワにソナムを殴らせよう。
- (11a) *butañ=kə krašis sonam tascor na-sə-wu-w.*
 部長=ERG タシ ソナム 書類 PROG-CAUS-与える-3s
 部長はタシにソナムに書類を出させようとしている。
- (12) *ñ-əpɛ ñ-əwe ka-sar yusthañ{yi-wu-sə-thal-ñ}.*
 1s:GEN-父 1s:GEN-祖母 INF-探す PST-3>1-CAUS-行く-1s
 父は（私に）祖母を探しに行かせた。
- (13) *ñ-əpɛ ña kə-mbri mənusčhen {mə-nə-wu-sə-čhe-ñ}.*
 1s:GEN-父 1s INF-遊ぶ NEG-PST-3>1-CAUS-行く-1s
 父は私を遊びに行かせてくれない。

- (14) *na səmnor kə-ŋjip=ke nuslan {nə-wu-sə-lat-ŋ}*.
 1s 熟慮 INF-細かい=IDEF IMP-INV-CAUS-する-1s

ゆっくり考えさせて。

「・・・をして～せしめる」の構文で、(7a)(8a)(9)(12)(13)のように主たる行為者が無標である場合と、(7b)(8b)(10)(11a)のようにERG/NIFでマークされる場合とがあり、2次的行為者はいずれも無標である。このことは、このような使役表現では格標示に関しては無標が基本であり、主たる行為者を特に明示すべき場合にのみ-NIFが現れ、項の語順は統語ルールに従うと解釈される。また、(11)のように「～せしめる」行為の結果を受けるpttが=gəによって焦点化される例がある。

このような用例の他、*kə-kte*「大きい」に対して、*kə-sə-kte*「大きくする、育てる」のような例もあるが、このように*sə-*が形容詞とともに生産的に働く類例は少ない。また、歴史的な検討を経て、既に語彙化している*sə-*を見いだすこともできる。たとえば、*ka-sna-skik*「修繕する」の*skik*は単独でも「直す」の意を含んでいる。では*sna*は何かと言うと、「良い」の意である。ところが、実は*na*には本来「良い」の意がある。つまり、*sna*はもともと**s-na < *sə-na*「良くする」であって、「良い」という形容詞にCAUSを表す接辞が接頭した形なのである。このような接辞の語彙化は随所に見られる。

4.2. *šə-*

この接辞はCAUSマークである点では*sə-*と同じであり、おそらくそこからの派生形式であるが、「助けて・・・させる、幫助する」の意を表す。

- (15) *na rwas {rwas-ŋ}*.
 1s 起きる

私は起きる。

- (15a) *na wuŋo sərwas {sə-rwas-ŋ}*.
 1s 3s CAUS-起きる-1s

私は彼を起こす。

- (15b) *na wuŋo šə-rwas {šə-rwas-ŋ}*.
 1s 3s CAUS-起きる-1s

私は彼が起きるのを助ける。

「借りる」「貸す」の対立を*šə-*で表すことができる。

- (16) *ña poñyi nə-rña-ñ.*
 1s お金 PST-借りる-1s

私はお金を借りた。

- (16a) *ña poñyi nə-šə-rña-ñ.*
 1s お金 PST-CAUS-借りる -1s

私はお金を貸した。

- (17) *ña poñyi nə-scə-ñ=ren təjim to-pa-ñ.*
 1s お金 PST-借りる-1s=て 家 PST-作る-1s

私はお金を借りて、家を建てた。

- (17a) *ña ñ-əpoñyi kə-ndo=tə ndo kor wužo ma-šə-scə-ñ.*
 1s 1s:GEN-お金 NOM-有る=DEF 有る が 3s NEG-CAUS-借りる-1s

私はお金があるにはあるが、彼には貸さない。

- (18) *štə wužo kə-šə-rña ka-ra w-əthep nə-ño.*
 これ 3s INF-CAUS-借りる INF-必要がある 3s:GEN-本 EVI-LKV

これは彼に貸してやらねばならない本なのです。

「借りる」「貸す」の対立は *sə-* で表すのが一般的であるが、*šə-* を使うのは「貸してあげる」と言う一種の待遇表現の現れかと思われる。

šə- が特に幫助の意なしに、全く *sə-* と同じ CAUS としてのみ働く例もある。たとえば、*pki* は「隠れる」という自動詞であるが、その他動詞形は *šə-pki* であって、**sə-pki* という形はない。また、*šə-čhit* 「濡れる」と *šə-lot* 「道に迷う」はいずれも CAUS- 形容詞の複合語幹である。但し、*čhit* と *lot* は現代語では自立的形容詞としては存在しない。

4.3. *rə-*

rə- が CAUS マークとして機能する例は下記の通りである。

kə-kšut 「出る」 : *kə-rə-kšut* 「追い出す」
kə-čhak 「少ない」 : *kə-rə-čhak* 「減らす」

tapu? 「子供」 : *ka-rə-pu?* 「出産する」
tascor 「手紙」 : *ka-rə-scor* 「書く」
tətha 「本」 : *ka-rə-tha* 「勉強する、学校へ行く」

もうひとつの例は *kə-ram* 「乾く」に関わる手続きである。これに対する他動詞形には *ka-kram* と *ka-pram* があり、いずれも「乾かす」を意味するが、*ka-pram* は「曝涼する」の意にのみ使われる。*kram* にせよ *pram* にせよ、既に他動詞化された形なのだが、これらの語幹が単独で現れることは少なく、多くの場合、*ka-rə-kram* と *ka-rə-pram* として出現する。Prins (2011: 479) にも *kəraʔm* ‘dry’ vs. *karəkraʔm* ‘dry in the sun’ が例示されている。なお、*ka-wa-kram* は「(乾かすために何かを) 広げる」の意である。

4.4. wa-

この接辞の主たる役割は形容詞と名詞を動詞化することである。たとえば、

(19) *n̄iʃo təʃi wa-stshe-n̄ mə-n̄os.*

2p 水 CAUS-熱い-2p Q-LKV

あなた方は湯を沸かすのですか？

(20) *ña towambiyañ {to-wa-mbiyas-n̄}.*

1s PST-CAUS-跛-1s

わたしは跛をひいた。

(21) *w-ərjap jaron̄ nə-čhe nowarmow {no-wa-rmo-w}.*

3s:GEN-奥さん 嘉戎 PST-行く PST-CAUS-夢-3s

彼は奥さんが嘉戎へ行った夢を見た。

(22) *ña bišer w-əpu nowardoñ {no-wa-rdo-n̄}.*

1s 昨日 3s:GEN-子 PST-CAUS-見る-1s

私は昨日彼の子に会った。

(15) では *stshe* 「熱い」を *wa-* が動詞化し、(16) では *mbiyas* 「跛」という名詞を「跛をひく」に、(17) では *rmo* 「夢」を「夢を見る」に転換する。(18) の *rdo* は「見る」の意で、*mto* の他動詞形と考えられる。この *rdo* に *wa-* が接頭されて、「見せしむる、会う」に意味が特殊化される。語の成り立ちからの説明は以上の通りだが、記述的には *wardo* 「会う」という語彙化した語幹形式を認めた方が適切かもしれない。

təndzor 「臼」に対して *ka-wandzor* 「挽く」もこの類例である。

- (23) *ña tərɡoʔ kawandzorn* {*ka-wandzor-n̩*}
 1s 穀物 PROG-挽く-1s

私は穀物を挽いています。

- (24) *ña kraʃis tərɡoʔ kaswandzorn* {*ka-sə-wandzor-n̩*}
 1s タシ 穀物 PROG-CAUS-挽く-1s

私はタシに大麦を挽かせています。

語彙的な対立としては、

<i>kə-mne</i>	「少ない」	:	<i>kə-wa-mne</i>	「減る」
<i>kə-rmuk</i>	「消える」	:	<i>ka-wa-rmuk</i>	「消す」
<i>kə-rlak</i>	「消える」	:	<i>ka-wa-rlak</i>	「消す」

やや趣の異なる対立として、

<i>ka-wa-rdə</i>	「ほどける」	:	<i>ka-rda</i>	「緩める」
------------------	--------	---	---------------	-------

がある。また、*kə-skren* 「長い」に対し、*waskren* は名詞としての「長さ」、*kə-wa-skren* は「長くする」である。

前節の *rə-* と本節の *wa-* に関し、Prins は「*rə-* と *wa-* は direct causative, *sə-* と *ʃə-* は indirect causative」と述べている。但し、*rə-* と *wa-* は語彙化されるものが多く、この仮説が妥当か否か疑問である。また、Sun と Jacques の説を引用する形で、「*sə-* が出現する文の ptt は human, *rə-* が出現する文の ptt は non-human」とも述べているが、これにも反例がある。

5. P5 接辞の組み合わせ

原則として P1-5 の各スロットに立つ接辞はそれぞれ 1 つであるが、P5 の使役接辞（特に *sə-*）に限り、相互動作を示す *n̩-*、再帰を示す *nə-* と組み合わせられることがある。例えば、

<i>ka-sat</i>	殺す
<i>ka-nə-sat</i>	己を殺す
<i>ka-sə-sat</i>	(誰かをして) 誰かを殺させる
<i>ka-sə-nə-sat</i>	(誰かをして) その人を殺させる
<i>ka-n̩-sat</i>	殺し合う

ka-sə-nə-sat 人々をして殺し合いをさせる

ka-sə-nə-sat と ka-sə-nə-sat には nə-sat と nə-sat の部分にいずれ語彙化が起きることが予測される。

6. 終わりに

ギャロン語における使役表現を概説してきた。おそらく WT ないし TB 諸語において起きたことと平行に、生産的使役接辞の語彙化⇒脱語彙化⇒語彙化した語幹の前にさらに別の接辞を置く、といった過程が何回か繰り返されてきたと思われるが、ギャロン語の現状はまさに接辞の母音要素消滅と挿入の過程の最中にある。これを歴史的に跡づけるには、WT との詳細な比較や羌系諸語における接辞の語彙化・脱語彙化の記述観察による一層の精査が求められよう。

略号

1	1 人称：first person	=	Clitic が後接することのマー
2	2 人称：second person		ク：constituent boundary one
3	3 人称：third person		degree higher than ‘-’
agt	動作者：agent	ABL	奪格：ablative
d	双数：dual	ABT	絶対時制：absolute tense
ex	存在：existence	ADVR	副詞を形成する接辞：
n	名詞：noun		adverbializer
neg	否定：negative	ALA	動作者非特定：
p	複数：plural		agentless action
ptt	被動作者：patient	APP	適用態：applicative
s	単数：singular	ATT	語気を和らげる副詞：
v	動詞：verb		attenuant
vi	自動詞：intransitive verb	AUX	助動詞：auxiliary verb
vt	他動詞：transitive verb	CAUS	使役：causative
<	<A で A 由来：	Chin.	中国語：Chinese
	originated from the right	COMP	比較級：comparative
>	行為が左項から右項へ向か	DAT	与格：dative
	う：	DEF	定（じょう）：definite
	action going from left to right	DIF	直接情報：direct information
-	形態の区切り：	DIR	方向接辞：
	morpheme boundary		directive/direction marker

ERG	能格：ergative	OPT	希求法：optative
EST	判断転換態：estimative	P	前接辞：prefix
EVI	エビデンシヤル：evidential	PFV	完了：perfective
FOC	焦点化マーク：focus marker	POSS	所有：possessive
GEN	属格：genitive	PROG	進行態：progressive
HON	敬語：honorifics	PROH	禁止：prohibitive
IDEF	不定（ふじょう）：indenite	PST	過去：past
IMP	命令：imperative	Q	疑問：question
IMPS	非人称：impersonal	RCP	相互動作：reciprocal action
INF	不定形：in nitive	REP	反復動作：repetitive act
INS	具格：instrumental	S	接尾辞：suffix
INT	感嘆詞：interjection	SFP	終助詞：sentence final particle
INV	逆行態：inverse	TB	チベット・ビルマ： Tibeto-Burman
IRR	非真実：irrealis	VP	動詞句：verb phrase
LKV	判定詞：linking verb	VPS	視点切替： view-pivot switcher
LOC	場所格：locative	WT	チベット文語 (ワイリー方式によるローマ 字転写)：Written Tibetan
NIF	新情報：new information		
NOM	名詞化標識：nominalizer		
Non1	非1人称：non-1st person		
NonV	非意志的：non-volitional		
NP	名詞句：noun phrase		

参考文献

- Jacques, Guillaume (向柏霖)
 2008 『嘉绒语研究』中国新发现言研究丛书. 北京：民族出版社.
 2013 Applicative and trovative derivations in Japhug rGyalrong. *LTBA* 36(2): 1–13.
 2016 Grammaticalization in Japhug and Gyalrongic languages. https://www.academia.edu/23037903/Grammaticalization_in_Japhug_and_Gyalrongic_languages
- Lin, Xiangrong (林向荣)
 1993 『嘉戎语研究』成都：四川民族出版社.
- LaPolla, Randy J.
 1992 On the dating and nature of verb agreement in Tibeto-Burman. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London LV.2, 298–315.
 2017 Qiang, Thurgood, Graham and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, pp. 773–789. London and New York: Routledge.
- DeLancey, Scott
 1980 *Deictic Categories in the Tibeto-Burman Verb*. Ph.D dissertation, Indiana University.
 1989 Verb agreement in Proto-Tibeto-Burman. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London LII(2): 315–333.
- Matisoff, J.A.
 2003 *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press.

長野泰彦

- 1984 嘉戎語の人称接辞 『国立民族学博物館研究報告』 9(4): 711–745.
- 2001 嘉戎語の基本構造 『国立民族学博物館研究報告』 26(1): 131–164.
- 2017 Cogtse Gyarong. *The Sino-Tibetan Languages*. London: Routledge, pp. 572–596.
- 2018 『嘉戎語文法研究』 東京：汲古書院.

Prins, Marielle

- 2011 *A Web of Relations. A Grammar of rGyalrong Jiāomùzú (Kyom-kyo) Dialects*. Ph.D. dissertation, Leiden University.
- 2016 *A Grammar of rGyalrong, Jiāomùzú (Kyom-kyo) Dialects*. Leiden: Brill.